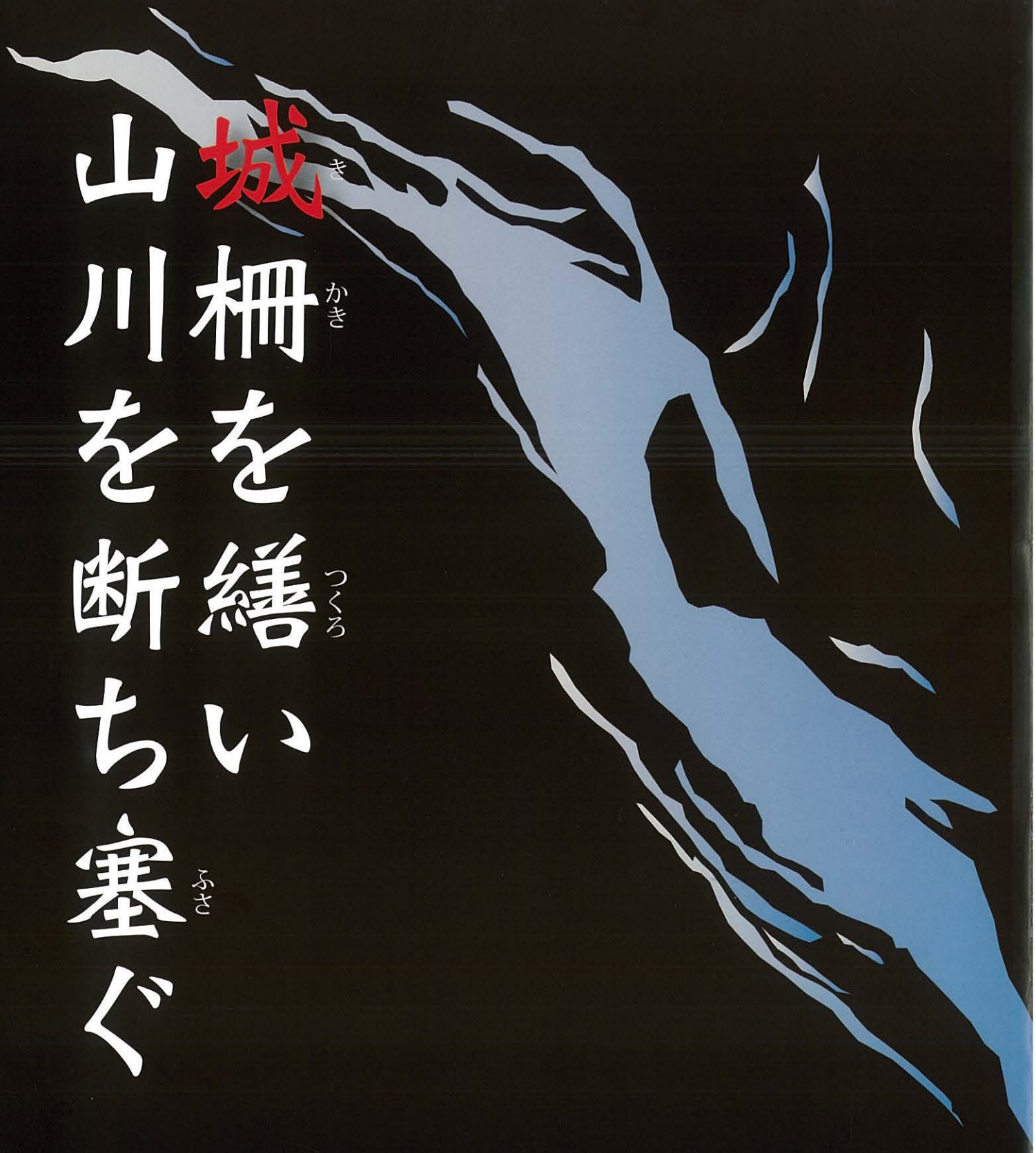
城（き）柵（かき）を繕（つくろ）い山川を断ち塞（ふさ）ぐ



第34回くるめの考古資料展

高良山神籠石と七世紀のくるめ

久留米市埋蔵文化財センター

ごあいさつ

毎年十一月には「文化の日」をはさんで「文化財保護強調週間」があります。これは文化的・歴史的に意義のある文化財が多数ある事を広く認識していただくための行事であり、文化財の普及啓発活動の好機でもあります。

久留米市では、この行事の一環として毎年「くるめの考古資料展」を開催しています。例年は前年度の発掘調査の成果をもとに遺跡の出土品などを展示し、調査の成果を市民の皆様にご紹介する場としておりましたが、三四回目を迎える本年度は、十月三十日・三十一日の両日にわたって久留米市で開催されます「第四回神籠石サミット」に関連し、主に七世紀の久留米を題材とした展示をおこなっています。

この展示をとおして、「古代くるめ」の息吹を感じていただくとともに、地元の文化財について考えていただく機会になれば幸いです。

最後になりましたが、展示会を開催するにあたりご協力いただきました多くの機関、関係者の皆様方に深く感謝の意を表します。

平成二十一年（二〇〇九）十月十七日

久留米市長　江藤守國

目次

ごあいさつ

目次・凡例

其の壱　神籠石とは何か……小澤太郎……1

1 神籠石の時代とその背景……1

2 神籠石と呼ばれるまで……2

3 神籠石論争……3

4 神籠石と朝鮮式山城……4

5 高良山神籠石をめぐる……5

其の弐　神籠石前夜の久留米……江島伸彦……7

1 五・六世紀の筑後地方……7

2 「磐井の乱」と水沼君……9

3 装飾古墳と船……10

其の参　激動の七世紀……11

1 前身官衙の成立……江頭俊介……11

2 筑後の「小水城」……小澤太郎……13

3 西海道……江頭俊介……14

4 集落の動向……熊代昌之……15

其の四　大きに地動る……小澤太郎……17

1 筑紫大地震と水縄活断層……17

2 神籠石の崩壊と七世紀の久留米……18

関係年表……塚本・小澤……20

展示協力・資料提供・主要参考文献

例言

1 本書は久留米市埋蔵文化財センター主催の平成二十一年度企画展示「第三十四回くるめの考古資料展―高良山神籠石と七世紀のくるめ」の展示解説図録として作成しました。

2 展示期間は平成二十一年十月十七日から十一月八日まで、久留米市埋蔵文化財センター展示室を会場としています。

3 展示構成と図録の構成は異なる場合があります。また、参考資料として展示品以外の写真も掲載しています。

4 開催にあたり多くの方々からご指導とご協力をいただきました。巻末に記し、厚くお礼申し上げます。

5 本書は、久留米市文化財保護課の小澤太郎・江島伸彦・江頭俊介・熊代昌之・塚本映子が分担執筆し、協議のもと小澤がデザイン・編集しました。

其の壱　神籠石とは

1 神籠石の時代と背景

七世紀は、内外ともに激動の時代であった。朝鮮半島では、高句麗・新羅・百済の三国抗争が激化、それが原因でそれぞれの国で政変を招く事態となった。そこへ新羅の要請で中国を統一した唐が軍事介入したため、各国は権力の集中を図ることで、国難に対処する道を探ることになる。

その頃我が国でも、独裁化の道を歩む蘇我氏に対して危機感を抱いた中大兄皇子らがクーデターを起こした（乙巳の変）。即位した孝徳天皇は、飛鳥から難波に遷都する（前期難波宮）。同時に、中央豪族の官僚化を手がける一方、宰を地方へ派遣して、戸籍の作成や田地の調査を開始するなど、地方豪族の支配領域を中央支配へ再編成するための一連の政治改革にも着手している。

六五五年に即位した斉明天皇は、飛鳥へ都を戻し、様々な事業を推進した。飛鳥やその周辺に執拗なまでに王宮造営などの新たな土木建設工事を行い、一方で東北北部から北海道にまで毎年のように遠征軍を派遣して、蝦夷などを服属させている。このように荘厳化された王都において、「異民族」に対する服属儀礼を行うことにより、王権の神聖化と強化を図ったものと考えられている。

さて、半島の統一をもくろむ新羅は、六六〇年八月、唐と協力し百済を滅亡させた。百済では遺臣を中心に復興運動が起き、斉明天皇に救援要請がなされた。同国は政治的にも文化的にも我が国とは緊密な関係にあり、斉明は即座に救援のための出兵を決定した。

しかし、翌年五月、外征軍を率い朝倉橘広庭宮入りした天皇も七月に急死。母の意志を受け継いだ中大兄皇子が指揮を執ることとなった。しかし、六六三年八月、白村江の戦いで唐と新羅の連合軍に歴史的な大敗を喫することになる。これにより、我が国は国家存亡の危機を迎えたのである。

唐・新羅の我が国への侵攻が現実味を帯びた翌年、水城を築造し、対馬・壱岐・筑紫へ防人と烽を配置した。また、九州における外交と軍事の拠点として大宰府が設置され、六六五年には、大野城・基肄城や長門城を築城、大宰府周辺の防衛網整備に力を注ぐ。さらに、六六七年までには瀬戸内沿岸部の讃岐城・屋島城、対馬の金田城、大和の高安城も築城され、都も内陸の近江大津宮へ遷都、中大兄皇子は即位し天智天皇となる。

半島では、唐と新羅によって高句麗が滅ぼされるが、六七六年には唐の勢力を一掃した新羅が半島統一を果たす。翌年からは我が国との関係修復もなされ、使者の往来も頻繁となっていく。

六七二年の壬申の乱後即位した天武天皇は、都を飛鳥に戻し、律令の制定に着手、対外的な危機が去ったこの機会を利用し、中央集権的な国内支配体制を整えていく。まさに古代国家は成立前夜を迎えたのである。

1 白村江の戦い関係図と７世紀後半の東アジア

2 日本における古代山城の分布。
※一部推定地を含む

■**朝倉橘広庭宮**…百済救済のために斉明天皇が遷都した宮。所在地については、朝倉市山田説・同志波説、小郡市上岩田説などがあるが、現段階では志波説が妥当であろうと思われる。

□**白村江の戦い**…現在の韓国錦江河口で行われた。唐・新羅連合軍対倭・百済連合軍による古代東アジア大戦ともいうべき戦い。『旧唐書』などによると、倭軍の400艘が炎上し「海水皆赤し」という惨状であったという。

2 神籠石と呼ばれるまで

現在高良山神籠石と呼ばれている列石遺構が、記録の上に現れるのは、鎌倉時代後期以前に成立したといわれる「高良玉垂宮縁起」が最初だ。

この縁起の中に、高良玉垂神が高良山の地主神である高牟礼神から、宿を借りる話がでてくる。その際、高良玉垂神は石によって山を取り囲み、その真ん中に住まいを構えたという。同史料では、この列石を「八葉の石畳」と呼び、住まいの方を「神籠石」と呼称しているのである。

同様の区分と呼び方は、近世にかけての史料にも受け継がれている。例えば、「絹本着色高良大社縁起」(3)や神職である大祝保房が書いた『高良記』、高良山中興の祖と呼ばれる寂源が、三ヶ月近くかけて列石線を発掘調査した際の「高良山八葉石記」(4)などがあげられよう。

一方、江戸時代中期に編さんされた『筑後志』には、「山頂社地の周囲、方十町を限り、巨石魚貫せり。これを神籠石(かうごせき)という。」とある。そして註にはわざわざ「俗に蓮花石と云ふは非也。」と記されている。ここで初めて、列石遺構を「神籠石」と呼ぶ例が現れたことになる。

幕末における筑後考古学の先駆者矢野一貞は、その著書『筑後国郡誌』で、「是を神籠石とも八葉石ともいふ。」とする。また、「八葉蓮華」という呼称が仏教に結び付けられた名称とし、実際は要害のために築かれた「城」であると看破している。

以上のように、中世～近世前期の史料からは、現在我々が「神籠石」と呼称している列石遺構を「八葉の石畳」と呼んでいたことがわかる。一方の「神籠石」については、現在「馬蹄石」と呼ばれる磐座のことを指しているのである。

ところが江戸中期には、「神籠石」と呼ぶ例が出現し、「八葉石」「神籠石」の二つの呼名が併存する。この混乱は、「神籠石」という名称が学会へ紹介される近代にまで続いていた可能性がある。

「神籠石」という名称で最初に取り上げた小林庄次郎は、その機能について「神域説」を唱えた。あるいは自説に即した名称を意図的に採用したと考えるのも、あながち邪推とはいえまい。

3「絹本着色高良大社縁起(部分)」に見える「神籠石(馬蹄石)」と崩壊した列石の表現(画面右下)。

5高良大社参道脇の馬蹄石。本来は磐座であろう。近世以前は「神籠石」と呼ばれた。

4高良大社の社頭にある石碑。寂源による「高良山八葉石」(列石線)発掘の由来が刻まれている。撰文は僧法雲、筆蹟は彼自身のものと考えられている。

■**寂源僧正**…高良山五十世座主。高良山顕彰事業を熱心に進め、高良山杉の植林、高良山十景の選定などを実施した。延宝3年(1675)には列石線の発掘調査を実施している。神籠石発掘調査の初めての例といえる。
□**矢野一貞**…1794－1879年。久留米藩士、御先手物頭格。和漢の書籍に通じ、歌人として、また絵画もよく描いた。フィールド調査を重視した考古学研究も熱心に行う。代表作に『筑後国郡誌』『筑後将士軍談』など。
■**『筑後志』**…久留米藩士である杉山正中と友人の小川正格が、安永6年(1777)に編さんした地誌。

3 神籠石論争

高良山神籠石を学界へ最初に紹介したのが、小林庄次郎であったことは先に述べた。明治三十一年(一八九八)に発表された「筑後高良山中の神籠石なるものに就いて」という論文がそれである。

この論文中では、高良山神籠石というのは霊域を示すものであると考えられている。高良山の中腹には式内社で筑後一の宮である高良大社が存在することから類推したものだ。

ところが明治三十三年、八木奘三郎がこれに反対、山城説を唱える。ここから神域説と山城説をめぐって、学界を二分する大論争が始まることになった。明治三十五年、喜田貞吉が「神籠石とはなんぞや」という題で、先の八木論文に対する反論を出す。これに対して翌年、八木も反論、加えて、朝鮮半島の古代山城を調査した関野貞が大正二年(一九一三)に、「所謂神籠石は山城なり」を発表し八木に加勢する形となった。以降、喜田・関野両氏を中心に議論が展開してゆく。

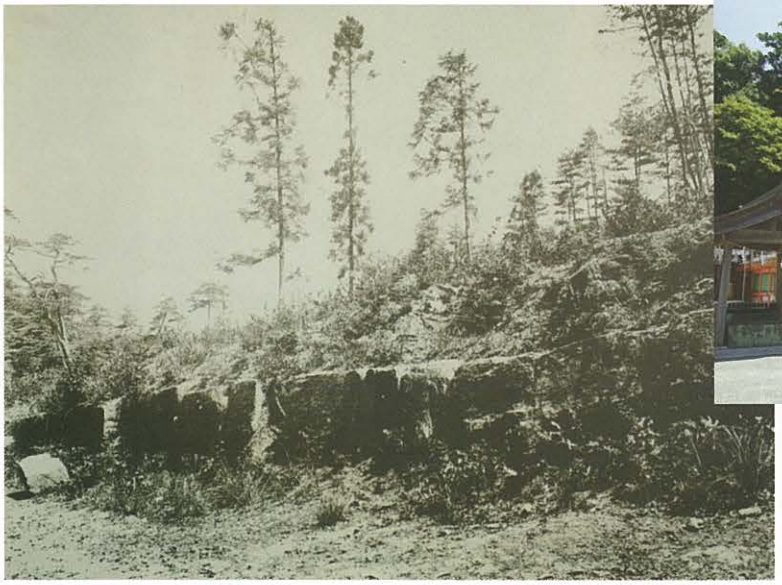
その後、谷井済一が朝鮮式山城と神籠石の構造を詳細に比較検討した上で、山城説を強調したが、結局、現状の表面観察だけでは説得力に欠け、やがて議論は平行線となった。そして、大類伸の「神籠石問題解決時期尚早論」が発表されると、議論は停滞していくことになる。

しかしついに、このような状況が打開される。昭和三十八年(一九六三)、佐賀県武雄市のおつぼ山神籠石、翌年には佐賀市の帯隈山神籠石と立て続けに発掘調査がなされたのである。調査を主導したのは、当時九州大学の考古学研究室に所属していた鏡山猛と小田富士雄である。

彼らは、列石が土塁の基底部に連なっていることや、その前面に約三m間隔で柱が並んでいる様子を明らかにした。この他にも、谷を遮断する部分には水門、土塁の切れ目には掘立柱で造られた門などを発見している。すなわち、大野城や基肄城など、当時の日本の正史である『日本書紀』にも記載されている、いわゆる「朝鮮式山城」と構造が極めて似ていることが判明したのである。このようにして神籠石は神域を示すのではなく、山城だということでほぼ決着を見たといえる。

6 北西側より望んだ高良山の姿。筑後の霊山として古来から信仰を集めている。山中には延喜式内社の高良大社が鎮座する。考古学的には、8世紀後半～9世紀初頭頃には神宮寺高隆寺が確実に存在しており、少なくとも奈良時代には成立していたものと思われる。

7 高良大社の社殿。現在の建物は、慶安四年(1651)久留米藩主の寄進による。



8 明治末年頃の高良山神籠石(勢至堂山付近)

■**八木奘三郎**…1866－1942。江戸に生まれる。東大人類学教室で坪井正五郎に師事。同教室、旅順博物館などを経て、満鉄勤務。台湾・朝鮮・中国などの転勤先で考古学調査を行った。

□**谷井済一**…1880－1959。和歌山県生まれ。京大大学院修了後、朝鮮総督府博物館を経て和歌山県文化財審議委員。佐賀県鳥栖市の柚比遺跡で甕棺300基を発掘したこともある。

4 神籠石と朝鮮式山城

我が国に二〇カ所ほどが確認されている古代山城は、『日本書紀』などの史書への記録の有無で大きく二分されている。すなわち、記載されていないものは「神籠石」・「神籠石型(式・系)山城」、記載のあるものは「朝鮮式山城」と呼ばれる。しかし、いずれも朝鮮半島起源の構造や技術を主体に築城されており、朝鮮式の山城であることにはかわりがない。以下にその特徴を記してみよう。

まず、立地から見ると、平野の背後の山にあることが多い。また、山裾には古代官道が走り、河川が近いなど交通の要所でもある。付近には、国府や国分寺、郡衙(ぐんが)など古代における重要施設が存在することが多い。高良山神籠石と筑後国府跡前身官衙(先行官衙)・筑後国分寺・西海道・筑後川などの組み合わせはその典型例であろう。

土塁や石塁といった城壁は山の尾根や谷を縫い、敷地を不定形に取り囲む。土塁は、「版築(はんちく)」という盛り土工法で築かれる。まず、堰板(せきいた)を設置し、その枠内に質の違う土砂を厚さ数センチ単位で、杵で突き固めながら盛り上げていく。こうすることによって壁面の立ち上がりは急となり、防御性が増す。城壁の高さは二mを超え、場合によっては一〇m近いものまである。なお、神籠石では、盛土の前に、土塁の裾部に長辺八〇cmほどの切石をずらりと並べている点が特徴的といえる。

また、標高が低くなる谷の部分は、多くが石塁によって遮断し、トンネル式の石組通水口を設けて谷水を城外へ排水している。水量が少ない場合には、石材の隙間から逃がす構造の場合もある。

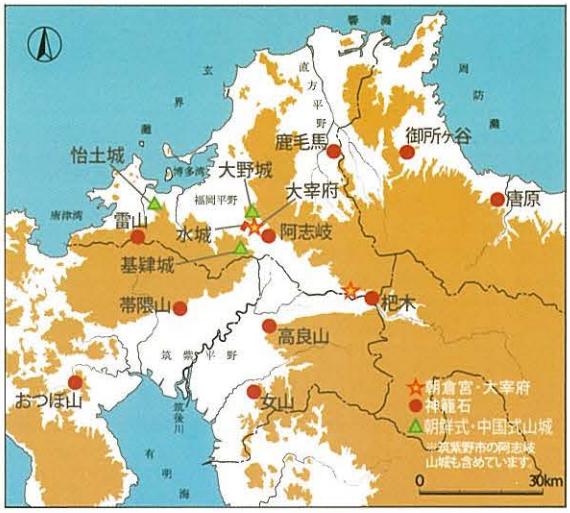
城門は水門に付設されたり、尾根筋の土塁を途切れさせて出入り口とし、掘立柱式や礎石式の城門が設置されたりする。城内には、朝鮮式山城である大野城や鞠智城のように、備蓄倉庫群や管理施設建物などが見られるものがある。神籠石においても近年、城内建物と考えられる施設が確認されつつある。他にも、櫓機能をもつと考えられる建物や貯水池などが認められる場合もある。

さて、朝鮮式山城については、先述したように築城時期もその目的も明らかだが、神籠石についてはいまだ確定していない。かつては、邪馬台国時代の砦説や筑紫君磐井の築城説もあったが、現在では朝鮮式山城に先行するのか後出するのかがひとつの大きな争点となっている。

先行説の多くは、『日本書紀』斉明四年是歳条にある「繕修城柵山川断塞」を神籠石の築城もしくは改築の記事と考える。また、その分布から朝倉宮を防衛する施設とし、百済救済戦争との関連で説明する。一方の後出説は、朝鮮半島における割石から切石への石材加工技術の発達から、切石を使う神籠石を朝鮮式山城より後の築城とする。また、国府や官道などとの関係から、中央集権化する過程における地域支配の拠点としての側面を重視する。だが出土遺物も少ない現在、この論争に決着が着くのはもう少し先のことになりそうだ。

10 朝鮮式山城の石塁の例(大野城の百間石垣)

11 神籠石における水門の例(女山神籠石の粥餅谷水門)



9 北部九州における神籠石と朝鮮式山城の分布

■「繕修城柵山川断塞」(城柵を繕い山川を断ち塞ぐ)…本文中にもあるように、『日本書紀』斉明四年是歳条或本の記事である。この前段は「国家以兵士甲卒西北畔」(国家、兵士甲卒を以て、西北の畔に陣ぬ)となっている。渡辺正気はこれが斉明天皇の西征を意味し、後段が神籠石の築城の記事であると考える。この解釈については最近、史料を詳細に検討した八木充が反論し、我が国の出来事ではなく百済国内の軍事的動向を示すとした。

5 高良山神籠石をめぐる

五つの峯を繋ぐように馬蹄形に構築される高良山神籠石の城壁(列石線)の全長は、約二・五～三km。列石線が残る南半部だけでも一・五kmを測る長大なものである。最高所は高良大社が鎮座する本宮山で標高二五一m、最低所は北谷水門推定地の標高六五m、標高差は実に一八〇mもある⑲。

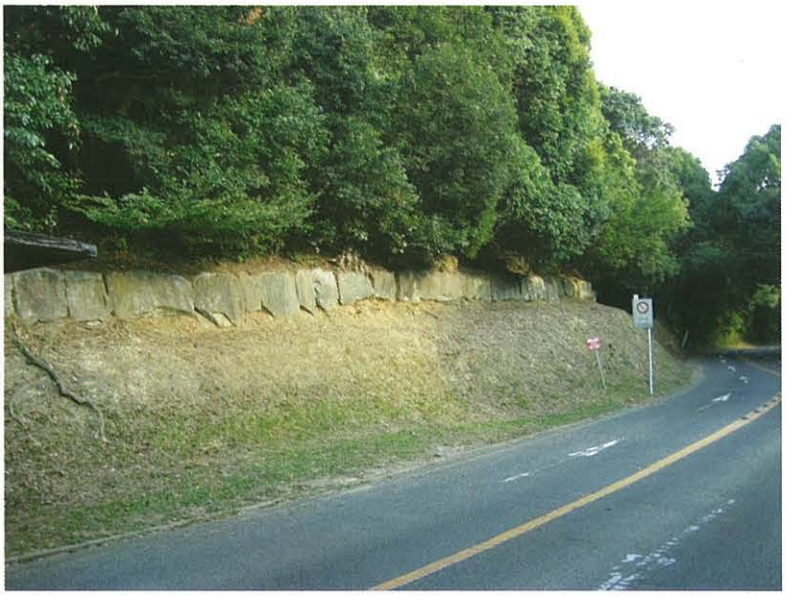
列石自体は、表面を小さく叩いたりノミで削る加工を施して方形に仕上げた切石である⑫。一部では安山岩や滑石も使用されるが、主体は付近で産出する緑泥片岩である。一個の大きさは、高さ・奥行きとも七〇～八〇cmほどである。長さは二〇～三二〇cmとバラツキがあるが、平均は八〇cmほどであろう。

列石は基本的に一段積みで直列に並べられているが、部分的には複数段積み⑱、母岩露頭を加工した箇所も見られる⑯。また、基本的に城壁はカーブを描くが、北谷南側と勢至堂山南西側⑮ではほぼ九〇度に屈折する箇所がある。両者はそれぞれ北谷・南谷水門を見下ろす見晴らしのよい位置にあり、望楼のような、重要な施設が存在した可能性も否定できない。

因みに、列石とともに城壁を構成する版築土塁は、古代山城では「夾築式」と「内托式」の二種類が認められる。前者は堤防状に形成したものであり、城の内外に急角度の壁面ができる。後者は、神籠石の場合、基部に列石を据えて、山の斜面に盛り土していく。すなわち、こちらは城内側に壁面がない構造なのである。高良山神籠石では、石塁の可能性がある水門部分を除けば、内托式のみを採用している。しかし、長い年月が経つうちに、積み土がすでに流れ去っているところがほとんどであり、残存するのはごく一部である⑭。

水門は、北谷・南谷の二カ所に存在したものと思われるが、現在は南谷のみに残る⑰。その規模は長さ約七～九m、高さ約三m、基底部幅は約九mである。石材は列石と同様、片岩を主体に安山岩などの方形の切石を使用している。これを本体の前面と背面に使用しているが、城外側では垂直に近い角度で、七段以上を積み上げていたものと思われる。谷の南岸は母岩の露頭であるが、取り付きをよくするためか、鈎形に掘削した痕跡がある。また、基礎部には大形の石材を敷き、かつ、本体芯部には礫が充填されており、少なくとも下部は石塁であったことがわかる。その上部については、土砂が堆積するものの礫が認められない。これが後世の堆積土なのか、当初からの積み土なのかは、現状では判断が難しい。

高良山神籠石は、筑紫平野に岬状に突出した耳納山地の先端という好立地である。北は阿志岐城・基肄城・大野城、西は帯隈山神籠石、南は女山神籠石が目視でき、これらの中心的な位置にある。烽火などを使えば相互に通信を交わすこともできたであろう。極めて重要な役割を持つ古代山城といえる。



⑫大学稲荷前の列石（右）と⑬石材の表面加工の様子（左）。石材を現場に据え付けた後に、工具で表面を滑らかにしていく。表面には工具の痕跡として、細かい凹凸が残っている。

■**石材加工**…石材表面の凹凸を、ノミやチョウナ、鎚などによって細かく打撃を加えて落として平らに仕上げていく。我が国では、古墳時代後期の横穴式石室や石棺の石材加工でも同様の技術が使われる。

□**烽火**…のろし。奈良時代の「養老律令」(軍防令烽置条)には、約21.6kmを基準に烽施設を設置するように規定がある。樋口一成も指摘するように、この数値は、高良山神籠石を中心とした筑紫平野の4城（帯隈山・女山・阿志岐・杷木）間の平均距離22.0kmと極めて近い。

17 南谷水門の現状。堤体の断面が露出した状態。

14 内托式土塁が比較的残っている箇所(19-C～D)。

18 列石は部分的に複数段積み上げる(19-南谷～C)。

15 勢至堂山南西の角部分(19-C)。望楼が存在したか。

16 自然の母岩露頭を利用した部分。窪みには切石をはめ込む箇所もある。写真奥には列石が続いている(19-C～D)。

19 高良山神籠石の全体図。北側は水縄断層により形成された急峻な崖となっており、現段階では列石線が確認されていない。

■**石塁**…石を積み上げた防塁のこと。三国時代の朝鮮半島の山城に多く見られる。神籠石の城壁の場合、基底部に切石を設置した土塁がそのほとんどを占め、水門など防御上の弱点のみに採用されることが多い。対して、瀬戸内系の神籠石や朝鮮式山城では多用される傾向にある。特に、国土防衛の最前線にある対馬の金田城は、石塁に取り囲まれた峻城として知られている。

其の弐・神籠石前夜の久留米

1 五・六世紀の筑後地方

五世紀は各地で大形の前方後円墳が造営される時代である。畿内河内の百舌鳥古墳群に見られる巨大な古墳が代表例である。周辺地域を見ても、久留米市高良内町所在の石櫃山古墳（全長一一〇m）や、久留米市の南に広がる八女丘陵には広川町所在の石人山古墳（一二〇m）などがある。

五世紀の中頃から後半に至り、高良内町所在の浦山古墳、同市大善寺町所在の御塚古墳、うきは市吉井町所在の月岡古墳、塚堂古墳が造営される。六世紀になると八女丘陵では、八女市所在の乗場古墳、岩戸山古墳などが著名である。

古墳の築造は、相当の労働力の集積、技術力の保持と統括が必要であることが想像される。このことは、各地の豪族が権力を持っていたことを象徴するのであろう。また、各地一斉に定型化した巨大な前方後円墳が造営されていることはヤマト政権の強大な政治的結合があったことが想起される。

八女丘陵に集中する首長墓の一群は八女古墳群と呼ばれ、先の石人山古墳以降は若干の時間的な空白があるものの、五世紀始め頃から年代を追って六世紀半ば～末頃まで前方後円墳が造営されている。連綿と続く系譜と古墳の規模は、筑後地方において他の首長墓群と一線を画す存在である。

八女古墳群の特徴として阿蘇溶結凝灰岩製の「石人石馬」が古墳の周りから発見されることである。著名な例として岩戸山古墳がある。

これまでの研究成果から八女古墳群は筑紫君の奥津城とされており、特に『日本書紀』の記載から、磐井の墓には多数の石人があったことがわかっている。

これらの石造物は有明海沿岸に所在する古墳から確認されており、有明海沿岸地域に対して勢威をもっていたことが窺える。

これに対して、久留米市内の首長墓群は藤山地区と久留米西部に当たる大善寺・荒木地区に分けられる。藤山地区には甲塚古墳、石櫃山古墳、浦山古墳、本山古墳が所在する。石櫃山古墳は、八女古墳群の石人山古墳とほぼ同時期の築造で、同規模の墳丘形態、内部主体を採用しており、八女古墳群の勢力に引けを取らないものである。当初は盟友的関係でありながら、拮抗した勢力を誇っていたのであろう。

大善寺・荒木地区で、広川沿いの丘陵に立地する首長墓群には御塚古墳、権現塚古墳、銚子塚古墳、鷲塚古墳、二子塚古墳が存在する。特に三重の周溝が巡る御塚古墳は非九州的な形態を有しており、ヤマト政権との強い関係が指摘される。

久留米の東、浮羽地方には月岡古墳、塚堂古墳、

20 相前後して築造された久留米市大善寺町の御塚(左)・権現塚古墳(右)（北東上空より、1987年撮影）

21 うきは市の若宮古墳群（南東上空より、1987年撮影）。中央右下の森が日岡古墳、その上の森が月岡古墳。

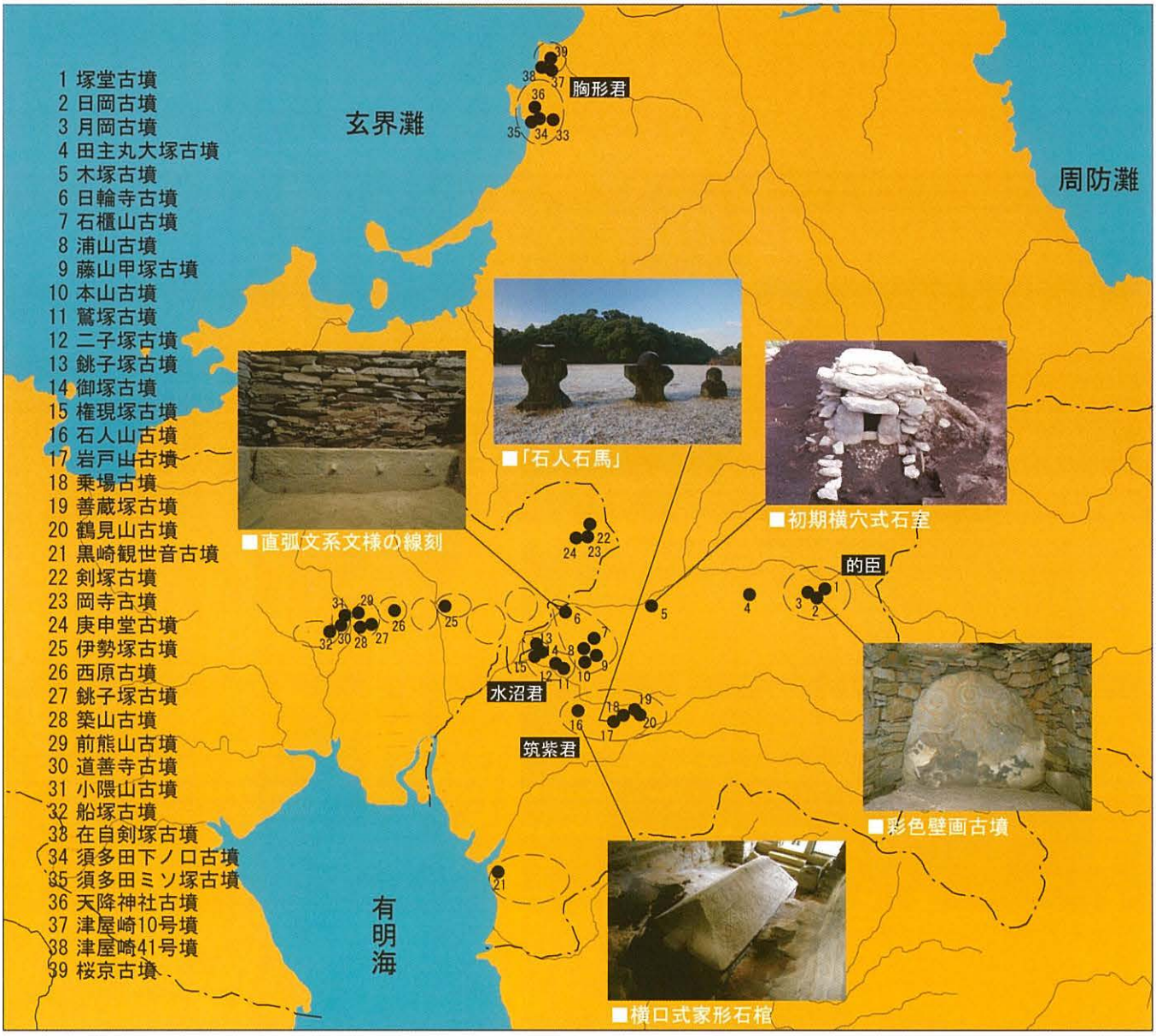
■百舌鳥古墳群…大阪府堺市一帯に広がる５世紀を中心とする古墳群。108基におよぶ大小の古墳で構成されている。中でも仁徳陵古墳は、三重の濠を含む全長が850mに達する日本最大の前方後円墳である。

□阿蘇溶結凝灰岩…阿蘇山の噴火で堆積した火山灰が硬化したもの。比較的加工が容易で、現在でも八女地方や熊本県では石灯籠などに使用されている。

日岡古墳の三基の古墳で構成される若宮古墳群がある。月岡古墳は二重の周溝を巡らし、副葬品が極めて畿内的要素をもった古墳で、畿内から派遣されてきた豪族の墳墓という見解がある。続く塚堂古墳も二重の周溝を持っているが、次の日岡古墳の段階では、九州的な要素が強まっている。これは、若宮古墳群の首長墓の系列が次第に在地化したことを物語っているのであろう。若宮古墳群の被葬者は的臣（いくはのおみ）の一族ではないかと推測されており、ヤマト政権との関わりが指摘されている。

広川沿いの古墳群は『日本書紀』景行天皇条の記事にみえる水沼君（みぬまのきみ）の墓所とされている。この豪族は伝承によると、宗像地方の豪族である胸形君と関係が深く、筑紫君の領域と隣接するものの、ヤマト政権との強い結びつきが指摘されている。また、航海術にも長けた一族であったと推測される。

22 御塚・権現塚古墳から出土した古新羅系土器の蓋（右）。6世紀前半頃のもの。この他に7世紀後半頃に位置づけられる印花紋土器蓋なども採集されている（清力美術館蔵）。



23 北部九州における主要首長墓の分布と有明沿岸地域に特有の墓制要素

■**水沼君**…『日本書紀』景行天皇四年条に「水沼別」、同十八年条に「水沼県主猿大海」、同書雄略天皇十年条に「水間君」の名が見える。最後の雄略条の記事は、身狭村主青（むさのすぐりあお）が呉から献上された2羽の鵝をもって、筑紫に帰着したところ、水間君の飼い犬がそれを噛み殺したという内容である。このことから、筑後川－有明海というルートが中国大陸とも繋がる水上の道であり、その下流域に勢力を張る首長層が、大陸や半島との交渉に関わっていた可能性が高い。御塚・権現塚古墳からの新羅土器の出土はこれを裏付ける史料である。

2 「磐井の乱」と水沼君

五二七年に始まる筑紫の豪族磐井とヤマト政権との内戦は翌年十一月、磐井の敗北で終わった。有名な「磐井の乱」である。

当時の朝鮮半島は統一を進める新羅とこれに圧迫される百済という情勢であった。ヤマト政権は、朝鮮半島との外交拠点として関係していた任那と友好関係にあった百済救済を目的として、半島へ遠征することとなる。磐井は新羅と呼応してこれを阻止しようとした。磐井の乱の発端である。

ヤマト政権と対峙するにはそれ相応の軍事力をもつことが必要である。磐井は有明海沿岸の諸豪族と関係が深く、これら豪族の長であったと考えられる。それは同じ石材を使用した石製品の分布に表れている(25)。

磐井はこの有明海沿岸の首長達の支援を受けてヤマト政権と戦ったのであろう。藤山地区の首長墓群も甲塚古墳の阿蘇溶解凝灰岩製の石障、浦山古墳の横口式家形石棺の存在からこの「有明首長連合」に組みしていたものと考えられる。

水沼君は筑後川の水運を活かし、航海術に長けた集団であったと考えられており、ヤマト政権は水沼君に接近することで大陸交渉の有明海ルートの抑えとしていたのであろう。御塚・権現塚古墳周辺からは新羅系の土器が出土しており、半島との交易を窺わせる資料である。

磐井は乱の際、海路を遮断して朝鮮半島の諸国が運ぶ貢物を奪っていたという。水沼君がこれに対処していたのであろうか。

『筑後国神名帳』によると筑後地方には宗像系の神社があったことが記されている。宗像地方には航海に深く関わる胸形君がいて、朝鮮半島との交流を持ちつつ、ヤマト政権とも密接な関係であったことが窺われる。水沼君は胸形君と深いかかわりがあり、ヤマト政権とも独自の結びつきを強めていったのではないだろうか。

磐井の乱後、ヤマト政権は物部連や阿曇連といった畿内勢力による直接支配を拡大していく。水沼君の一族はその配下に組み込まれて行ったのであろう。

24 伝岩戸山古墳出土石人。この石人は矢野一貞の『筑後将士軍談』にも描かれている。久留米市文化財収蔵館蔵。

26 浦山古墳の横口式家形石棺。内部に線刻文がある。

25 主な横口式家形石棺・石人石馬と装飾古墳の分布

■**有明首長連合**…柳沢一男が提唱する概念。有明海沿岸地域の首長墓の墓制には、極めて共通性が高い構成要素が認められることから、この共有関係をこの地域における首長間に結ばれた姻戚関係や同盟関係といった政治的結合と想定したもの。

3 装飾古墳と船

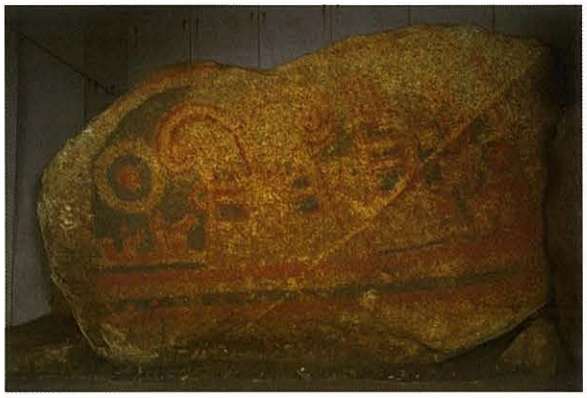
筑後川流域において、彩色古墳が盛行するのは六世紀以降であり、日岡古墳がその初現である。

同墳の築造年代については、前述の「磐井の乱」以降であると考えられており、ヤマト政権と九州の大豪族である磐井の内戦が及ぼした影響が、筑後川流域における装飾古墳の登場という事象に現われていると言えよう。

日岡古墳の玄室奥壁は、同心円文、連続三角文、蕨手文を描き、左右側壁には船や鳥、馬、太刀、靫が描かれ、ここに筑後川流域の装飾古墳に描かれる図文が網羅されていると言われている。

また、日岡古墳の装飾には全国的に見ても例が少ないとされる魚の絵がある。同系列の首長墓である月岡古墳から出土している眉庇付冑の装飾としても魚が掘り込まれている。

27 久留米市善導寺町鎮西橋付近から望む筑後川支流の巨瀬川と耳納連山。筑後川流域は船材として最適な楠の産地であった。また、近代以前の筑後川は、重要な水上交通の道でもあった。



28 全国的に著名な珍敷塚古墳の奥壁装飾。画面左側に、ゴンドラ形の船や漕ぎ手、舳先の鳥などが描かれる。干満の差を利用し、筑後川から有明海へ、そして外海へと渡る豪族達の雄姿が想像される。

これら二つの魚にはどのような意味が込められているのであろうか。『古事記』の神功皇后の新羅遠征に関する記述には、「海原の魚が大小を問わず、ことごとに御船を負って渡った」と記されている。このことから海原の魚は航海を助ける霊魚として信仰を集めていたことが窺える。

朝鮮半島ではこの頃になると新羅の勢力が強大となりつつあった。ヤマト政権と友好関係にあった百済は新羅に圧迫され、救援を要請してきた。『日本書紀』には筑紫に滞在して百済から援軍の要請を受けた内臣が、欽明天皇十五年（五五四年）、勅命によって「援軍の数は一千、馬百匹・船四十隻をすぐに発信する」と返答している。このような状況下で北部九州は朝鮮半島へ渡るための前線基地としての役割を果たしたのであろう。

屋形古墳群に属する珍敷塚古墳、原古墳、鳥船塚古墳には船が描かれている。『肥前国風土記』には景行天皇巡行の際、生葉山を（造船のため木を伐る）船山とし、高羅山（現高良山）を（梶を作るための）梶山として船を造って備えたとの記述がある。このことは耳納連山の木々が船材として使用され、これに携わった人々がこれらの古墳の被葬者と考えることはできないだろうか。

その後、五六二年にヤマト政権が半島南部の任那四郡を新羅に割譲する事件が起る。この四郡（北加羅）の長官が的臣で日岡古墳の被葬者ではないかと考えられている。朝鮮半島情勢の悪化はヤマト政権にとって早急に対処せざるを得ない外交問題であり、以降七世紀に至り、本格的な対外戦争を繰り広げていく。

29 月岡古墳出土の眉庇付冑（上）と装飾に見られる魚（右）。（うきは市教育委員会蔵）

■的臣（いくはのおみ）…『日本書紀』景行天皇十八年条に「的邑」、同書仁徳天皇十二年条に「的臣祖盾人宿禰」、同じく欽明天皇十五年条に「的臣」が記載される。盾人宿禰の鉄盾・鉄矢の逸話や宮城十二門の中に的門があることなどから、的臣は中央において軍事を職掌としていたと考えられている。また、欽明朝では、いわゆる「任那日本府」に駐留しており朝鮮半島とも関係が深い。浮羽地方との直接の関係を示す史料は見あたらないが、的と生葉、浮羽は同義であり、的臣は同地方を拠点としていたものと思われる。

其の参 激動の七世紀

1 前身官衙の成立

平成十七年十二月、久留米市合川町の周知の遺跡「筑後国府跡」田代地区内にて宅地造成に伴う試掘調査が行われ、一～一・五mの大形の方形掘形が検出された。これは、大形建物の柱穴である。早速、確認調査が行われ、四面に庇（ひさし）を持つ大形掘立柱建物であることがわかった。遺構を保護するために最小限の掘削しか行っていないため遺物は少ないが、柱穴から七世紀中ごろから後半にかけての土器が検出された。以前の調査からこの付近に七世紀にさかのぼる建物の存在がわかっており、さらに東限大溝と呼ばれる人工の流路からは、その時代の鍛冶工房や官衙の存在を示す遺物が検出されていた。これらは、合川の地に七世紀末に国府が建設される以前から、重要な施設が存在したことを示している。そして大形四面庇建物（しめんびさしたてもの）は、まさにその施設の中核となる正殿であることが確認された。

30 台地北縁部に沿って、断面がV字形で、幅約6m、深さ約3mの大溝が掘削されている。台地下にも堀状遺構が確認されている。

31 前身官衙の地勢と主要遺構分布。河川や濠で囲い込んで防御している。

四面庇建物が検出された合川町田代地区は、枝光台地の北西部に位置する。筑後川中流の左岸にあり、高良山を背にしたこの台地からは、北・西・東に平野を見渡すことができる。七世紀は有明海の海岸線が三潴（みずま）町付近までできていたため、有明海からの玄関口として、先は海外まで続いている交通の要衝であり、軍事的にも当然拠点となり得る場所である。このような天然の要害である枝光台地をさらに人工の溝や土塁で囲い込んだ施設が前身官衙（ぜんしんかんが）（先行官衙）である。高良川を西限として、北側を二重の濠と一条の土塁（どるい）で、東側を自然地形を利用した濠で区画したバチ形を呈する南北六〇〇m、東西七〇〇m、南辺長三〇〇mの区域内に、四面庇建物、南北棟の同規格建物群、東西棟長舎建物群などの施設を設けている。正殿的性格を持つ四面庇建物は、桁行（けたゆき）五間×梁間（はりま）三間、庇を含めた長さは一八m×一二・九mである。床面積は百十二㎡を測る。その約七〇m北に同規格の南北棟建物が並ぶ。この建物は桁行五間×梁間三間で間仕切りを有する。正殿から約一五〇m南にある東西棟建物群は、九間×三間、七間×三間、七間×二間などの大形のもので、倉庫的性格を持った建物群である。またその付近には、区画溝と思われる連続土坑（どこう）群が存在する。鍛冶・工芸・筆記に関する遺物が多く出土した東限大溝の両岸には小規模の掘立柱建物や竪穴住居があり、工人集

32 前身官衙の中枢部。左が北。中央に正殿と思われる大形の四面庇建物がある。図右下の水色表記は連続土坑である。

■**四面庇建物**…通常の側柱のみで構成される建物よりも格式が高い。政庁の正殿などに採用される構造。柱を建てて造られる主要な空間を身舎(もや)というが、ここから庇を四方に出すと、さらに屋内の空間を広くとることができる。四面庇の建物は、梁間が3間であることが多い。2間の建物よりも小屋組が高くなり、屋根が高く見栄えもよい。

□**前身官衙**…官衙とは役所のことである。ここでは筑後国府の前身の役所という意味だが、筑後国の成立以前の施設であり、国府とは機能を異にしていた可能性が高い。このため近年では、先行官衙とも初期官衙と呼ぶ向きもある。

団の居住地もしくは作業場であったことがうかがえる。

では、前身官衙の性格を物語る遺物たちを簡単に紹介しよう。それらは、大きく三つに分けられる。まず漆などの工芸材料、墨書土器や硯など識字層と行政機構の存在を示す遺物（官衙的遺物）鉄器や青銅器を生産するために使用した道具とその副産物（鍛冶関連遺物）である。東限大溝からは、それらの遺物が大量に出土している。33-1は鉄を溶かす炉に差し込んで空気を送るフイゴの羽口、同じく2は鉄滓、3は銅を溶かす坩堝と銅滓、4は漆が付着した須恵器の蓋、5は円面硯、6は墨書土器である。これらの遺物の出土から、防御性に優れた区画内に行政府と工人集団が存在し、軍事・政治両面において地域の拠点となる施設であったことがうかがえる。

このような施設が一体なぜ、何の目的で建設されたのだろうか。前身官衙が築造された七世紀の倭国は、内外両面において大きな波に晒された激動の時代であった。百済を救済するため斉明天皇自ら九州に下って陣を張り、城柵を築造した。六六三年には白村江で倭軍は大敗し、唐・新羅軍の倭国侵攻の脅威が高まった。その脅威がおさまると、隼人の乱など国内での不安定な情勢が続いた。対外的な脅威と律令国家形成への激動の中で、最重要拠点であった朝倉橘広庭宮や大宰府を守り、そして有明海を経て朝鮮半島や南九州を牽制するための要地である久留米の地に、このような防御性の強い軍事・政治的拠点が建設されたことは、いっこうに不思議なことではない。

33 東限大溝から出土した遺物。７世紀半ば～８世紀に及ぶ、円面硯や墨書土器、漆が付着した土器や坩堝などの出土は、一帯における工房や行政機構の存在を裏付ける。

34 東限大溝。幅約７～10mを測る。溝内の堆積は上下二層に分かれる。下層は７世紀半中ごろ～同後半、上層は８世紀代の遺物が大量に含まれる。

35 前身官衙と関係遺跡の分布。「藤山道」や河川など、西海道以前の主要交通路沿いに配置される。

36 筑後国府跡２１０次調査で発見された大形の四面庇建物。前身官衙の正殿建物と考えられる。身舎の柱穴内に立った人物と比べると、柱穴の巨大さがよくわかる。

■鉄滓・銅滓…鉄や銅を製造する際、砂鉄などの素材に含まれる不純物は高温のため溶け排出される。これを鉱滓、スラッグとよぶ。Ⅰ期国府期にあたる大溝上層からは、フイゴの羽口や坩堝、木炭、砥石なども発見されていることから、国衙工房における金属器生産は明らかである。このことを裏付けるように、天平10年「筑後国正税帳」には、「造銅竈工」に直稲などが支給されたことが記載されている。

2 筑後の「小水城」

筑後国府跡前身官衙(先行官衙)の南方三・五kmの地点に上津土塁がある。ここは、西に延びる二つの丘陵に挟まれる谷となっており、その中央付近を上津荒木川が西流する。現在、土塁本体は宅地化によってそのほとんどが削平を受け、納骨堂脇に、地上のわずかな高まりを残すのみである。しかし、字寄図なども参照すると、高さは不明ながら、全長約四五〇m、幅約二〇mに及ぶ巨大な土木構築物であったものと推定される。

昭和五十九年(一九八四)、土塁周辺にトレンチが入れられた。近世墓などに破壊されながらも、地下部分には、良好な状態で土塁の版築土層が残っていた。版築土層は、一層の厚さは五～六cmほどだが、黒色土・褐色土と白色系粘土を交互に使い、硬く突き固められて積み上げられている。残存する盛土の高さは、最大一・五mほどであった。

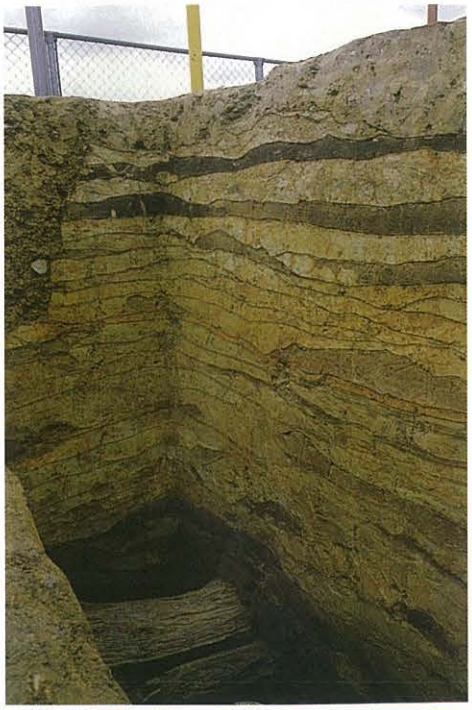
一方、版築土層の下部は、青灰色粘土層や泥炭層から構成され、自然木や枝葉・ドングリなどを大量に含んでいる。そしてその直下は地山の砂層となっている。

同様の構造は、大宰府の水城でも見られ、それぞれ「版築工法」「敷粗朶工法」と呼ばれている。これらの土木技術は古代中国で生まれ、朝鮮半島経由で我が国に伝わったものである。後者は軟弱な地盤に重量のある土塁を構築する際に、基礎の滑りを抑える効果がある。

しかし、強固に造られたはずの上津土塁の版築層であるが、一度崩壊し、再び版築工法によって修復されていることが判明している。松村一良によれば、土塁崩壊の原因は単なる土圧などではなく、地震の液状化に伴う噴砂現象によって地盤が陥没したためであるという。出土遺物として、版築土中から土師器片、再版築土を覆う遺物包含層中から須恵器蓋がある。これらの土器から古墳時代後期以降、八世紀後半までの間に築造・地震による破損・補修が行われたことがわかる。

なお、土塁の南側には、幅約一八mの堀状遺構が存在する。この点も水城と非常に似た構造といえ、「小水城」とも呼ばれている。この水城は、浦山丘陵裾を通り、旧三毛郡黒崎（大牟田市）へと抜ける律令以前からの交通路「藤山道」を遮断する形で築造されている。

37 納骨堂脇には、現在も土塁の一部が残る。



40 地下に残っていた版築層。極めて硬く突き固められており、発掘調査の際は、ツルハシや唐鍬で掘り下げたという。

38 土塁下の敷粗朶の様子。

39 土塁下の砂層から出土した弥生時代後期の甕形土器片(左)と再版築層を覆う包含層から出土した奈良時代後半の須恵器蓋片(右)。

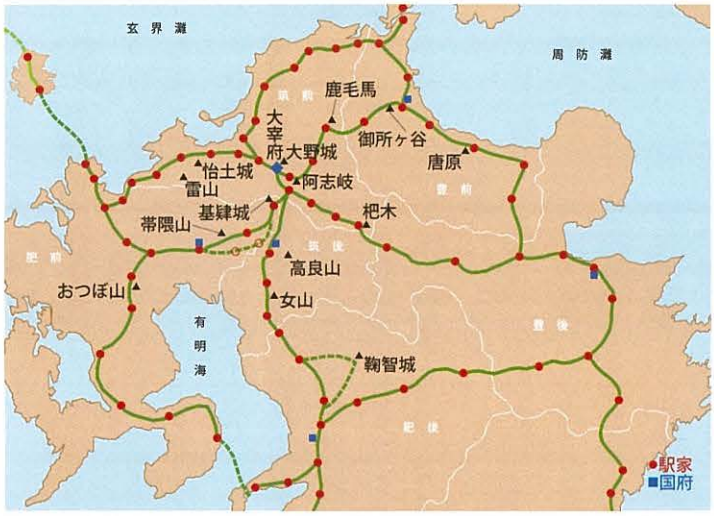
■**藤山道**…松村一良によれば、浦山丘陵と上津土塁跡の接点から、丘陵裾を東へ進み、藤山を経由して南下、黒崎へと至る古道の痕跡が辿れるという。この古道沿いには、八女市岩戸山古墳をはじめとする大小の古墳や、正恵・大坪遺跡（広川町）、女山神籠石（みやま市）など、評・郡衙推定地、神籠石などが存在する。『日本書紀』景行天皇十八年条に、「丁酉に、八女県(あがた)に到る。即ち藤山を越えて南粟(栗か)崎を望りたまふ。」とあり、文献史料からもその存在を伺わせる。

3 西海道

道路は重要な施設間を結ぶために建設される。現在の久留米市内にも戦前に旧国鉄の駅から軍の施設を結ぶために作られた道路が残っている。古代においてもその性質は普遍であり、九州には大宰府を起点として各国の政庁など重要施設に向かう道路が敷設されていた。この久留米には、大宰府から小郡を通って久留米市合川を経由して羽犬塚方面に抜ける西海道と、現在の成田山の西側から山沿いを通って八女に抜ける藤山道、久留米市合川町から耳納山地北麓に併行して東へ延びる道などが存在した。西海道は八世紀初頭、律令制のもと、日本全国に敷設された道路網の一つである。

全国が五畿七道と呼ばれる行政区に区分され、行政区と同じ名称の道路が建設された。今でいう国道を駅路と呼び、郡衙間など、やや狭い範囲をつなぐ道を伝路と呼んだ。駅路の位置は、はじめは、歴史地理学者などによって「車路」「車地」等の地名や字境などを参考に推定されていた。実物が発見されたのは、平成四年四月、久留米市諏訪野町上牟田で発掘調査が行われた際であり、側溝を伴った路面幅七m以上の直線的な道路遺構が発見された。その後さらに藤光町字車地での発掘調査（車地遺跡）、筑後国府域などで同様の遺構が発見された。駅路の路面は、小礫や土器片で敷き詰められており、直線的形状をもち、道路幅は七～九mある。画一的で大規模な施設である。

駅路は、八世紀に全国的に整備されるが、それ以前の七世紀後半代はどうだったろうか。倭国は朝鮮半島で唐・新羅と戦争状態にあり、白村江の戦いの前後に各地に防衛拠点が建設された。前身官衙（先行官衙）や上津土塁もその一つである。九州防衛の中核基地である大宰府を取り巻くように要所に軍事施設が設置されており、前身官衙とそれらを繋ぐ道が、何らかの形ですでにあったと考えてもおかしくはない。また、藤山道は、駅路や伝路と違い、道沿いの古墳の分布等から、七世紀には既に存在したと考えられている道である。女山神籠石から上津土塁を通っており、前身官衙建設後は、上津土塁を抜けてから北進してそれらを結んでいたかもしれない。



41 北部九州における西海道路線と古代山城・国府の位置。西海道は「遠の朝廷」と呼ばれた大宰府を中心に放射状に整備される。国府や山城はそれに近接する位置にある。

42 久留米市諏訪野町上牟田遺跡の西海道。両側溝は何度も掘り直され改修されている。

43 久留米市藤光町車地遺跡で検出された西海道。写真奥は荒木町の字車路。

■「車地」「車路」地名…1970年代に古代官道研究の第一人者である木下良が着目した地名。これらの地名を繋ぐように大字境、畦などが連続しており、古代官道の遺称であろうとした。市内「車地」遺跡の調査では、推定路線から道路遺構が出現し、この歴史地理学的方法から導き出された仮説が正しいものであることを証明した。

□古代官道の特徴…駅路は幅員が7～12mもあり直線的に延びる。約16km毎に駅家（うまや）を設置し、駅馬を備えた。役所間の連絡の他、軍事道としての機能もあったといわれる。

4 集落の動向

古代における集落は、発掘調査の例が少なく、詳しいことはわかっていない。特に七世紀の集落については不明瞭なのが現状である。ここでは、発掘調査が行われた集落遺跡を取り上げ、七世紀前後の時代の集落について述べていきたい。

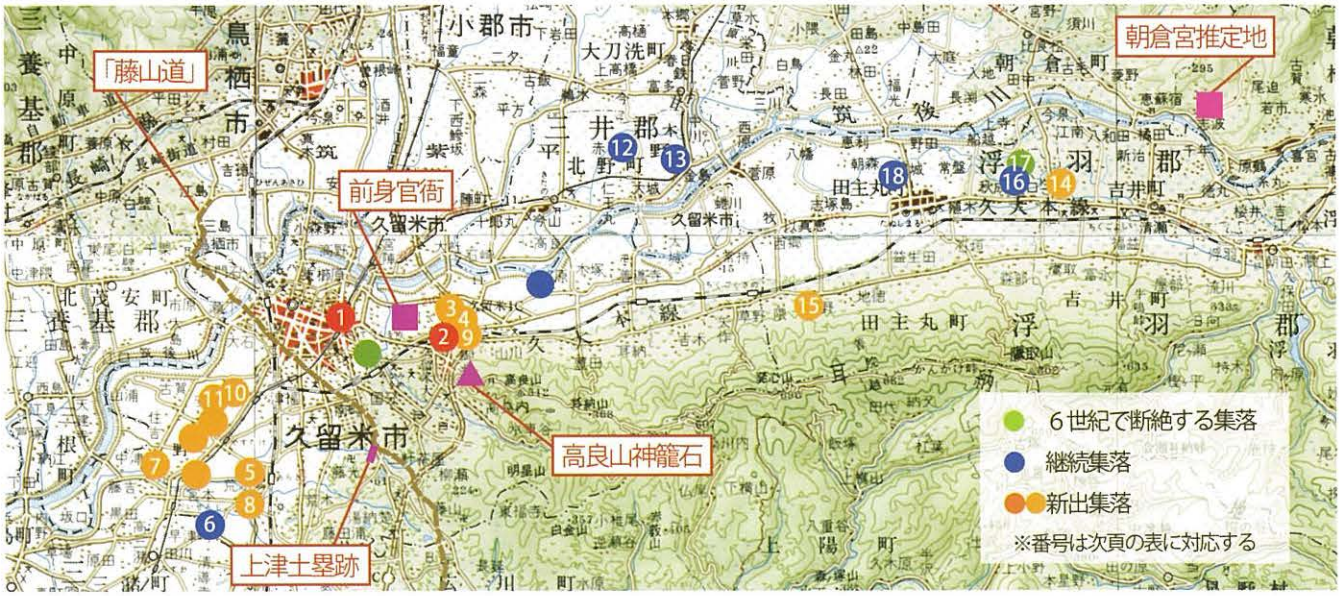
45のように集落の分布は、久留米市のほぼ全域に渡っているが、特に筑後川や広川などの河川沿いに集中している。これらの集落は、河川の自然堤防上に立地し、後背湿地（こうはいしっち）における耕作と河川を利用した交通を基盤とした集落と考えられる。近年では耳納山麓域にも集落が発見され、内陸部にも集落所在が確認されている。

集落には、古墳時代から続いている継続的な集落と、七世紀後半～八世紀前半になり現れる集落がある。古墳時代から続く集落としては、北野町古賀ノ上遺跡（45-⑬番）、荒木町旗原（はたんばる）遺跡（45-⑥番）などが、新出集落としては、南薫西（なんくんにし）町の南薫西遺跡（45-①番）、田主丸町竹野小学校遺跡（45-⑮番）がそれぞれ代表的な遺跡と言える。

古賀ノ上遺跡は、六世紀より集落の形成が始まり、九世紀の終わり頃までは確実に集落が継続する。竪穴住居を主体とした六世紀の集落は、次第に掘立柱建物を含む集落に移り変わり、八世紀の後半になると、集落の空閑地に大型の掘立柱建物群が出現する。それに伴って、「兵」「内」などの墨書・刻書土器や硯・瓦といった官的な遺物が出土する。このことから、古賀ノ上集落が次第に発展し、周辺地域の中心となっていったと考えられる。安武町今泉遺跡でも同じような状況が確認されており、前時代から伝統的に継続してきた集落が次第に発展していき、地域の中心的な地位を占める状況が一つのパターンとして読み取れる。

対して、南薫西町の南薫西遺跡、田主丸町竹野小学校遺跡は、七世紀後半代になって集落が営まれる。南薫西遺跡は、筑後川の左岸の台地上に所在する遺跡である。遺跡からは縄文時代の落し穴と七世紀から一〇世紀までの遺構が確認されている。但し、縄文時代から七世紀までの間には生活の痕跡が確認されていない。南薫の台地に集落が

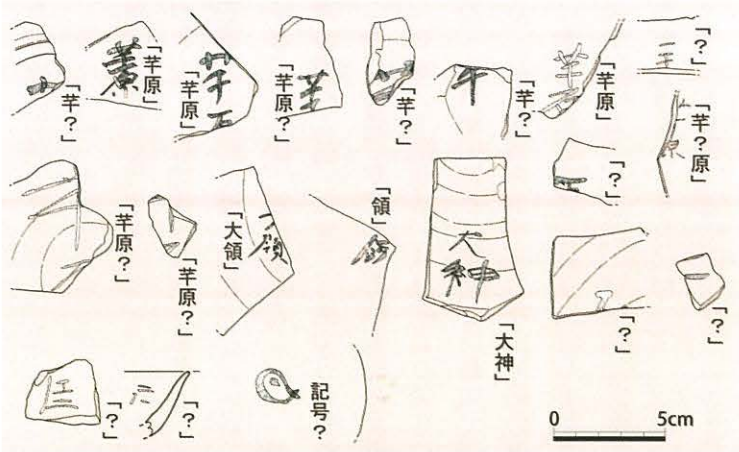
44 上空から見た古賀ノ上遺跡。奈良時代後半になると、集落の一角に、計画的に配置された大形の掘立柱建物群が忽然と出現する。



45 久留米市内における6～9世紀の集落分布

■**墨書・刻書土器**…土器の底や内側の部分に、墨や刻みで文字が書かれている土器。墨で書かれているものを墨書土器、刻んで書かれているものを刻書土器という。
□**鉄滓**…鍛冶精錬の時に出る鉄屑のこと。鉄滓が出土することによって鍛冶が行われていたことが分かる。
■**都城系暗文土器**…7世紀に近畿地方で流行した土器で、器の内側に色々な模様が描かれている。

47『筑後国神名帳』（高良大社蔵）御井郡の項にみえる「大神神社」と「芋原神」の名（赤線部）。



46 南薫西遺跡から出土した墨書・刻書土器。郡の長官である「大領」の官職名や「芋原」「大神」といった神名が目立つ。祭祀に郡の役人が関与したか。

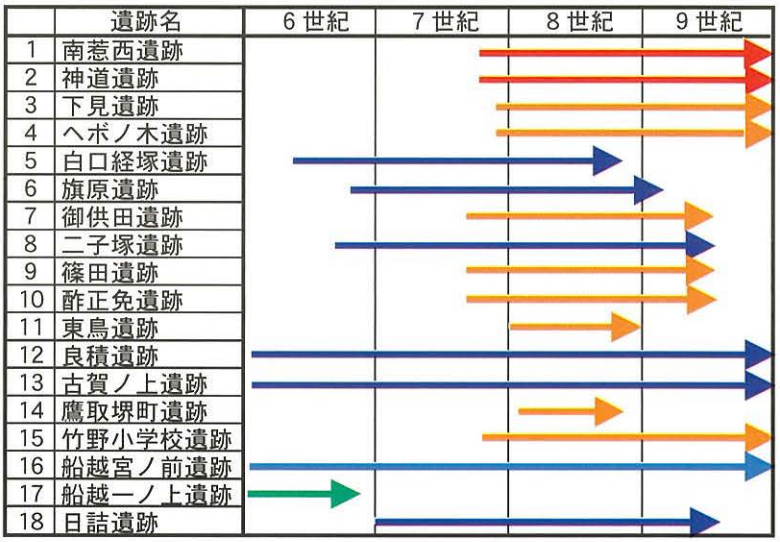
成立するのは七世紀後半になってからである。集落の規模は不明だが、竪穴住居が次第に掘立柱建物に変化していくところは、他の集落と共通する。

一方、集落の成立段階から官的もしくは公的な性格を帯びる点が、伝統的集落との違いと言える。南薫西遺跡の場合は、長方形の竪穴住居から、鉄滓や鉄製紡錘車（ぼうすいしゃ）などの生産関係の道具類や、都城系暗文土器など畿内地方との関係をうかがわせる遺物が出土している。また、八世紀代のものとしては、「芋原」「大神（おおみわ）」「大領（たいりょう）」と書かれた墨書・刻書土器が二二点出土している。この内、「芋原」「大神」は、高良大社に所蔵されている『筑後国神名帳』に、「芋原神」「大神神社」と掲載された神名であることが判明した。御井郡の大領が、「芋原神」「大神神」に関わる祭祀を行っていたと考えられ、大形の掘立柱建物も確認されており、郡の中心的集落と考えられる。

竹野小学校遺跡は、七世紀から竪穴住居が営まれ始める。集落の開始と同時に工房的な性格を持っており、鉄滓や鞴などが発見されている。八世紀代になると「廣国」「福」と書かれた墨書土器が出土している。竹野小学校遺跡で注目されるのは、五世紀後半代の古墳を破壊して集落が形成されていることである。古墳の築造から約一〇〇年前後で、墓を破壊して集落をつくっていることは、古墳造営集団とは別の勢力の人々がやって来、在来の人々を排除して定住したと考えられる。

このように、七世紀を画期として集落の状況を見てみると、伝統的な集落が徐々に成長（集約？）して地域の中心的な存在になる例と、突如、何もない土地や既存の人々を押しのけて集落が営まれる例とに二分される状況がうかがえる。特に後者の新出集落について言えば、初めから公的あるいは官的な意図が働いている状況がうかがえ、計画的に集落を形成したように考えられる。

ここに、七世紀の混乱と、筑後国府前身官衙（先行官衙）の成立や高良山神籠石の造営といった歴史的な流れとの連動性が見出せるのではないだろうか。



48 久留米市内の６～９世紀集落消長表

■「芋原」（せんばら・ちはら）…芋とは草が生い茂る様子という意味の漢字で、?原とは草原の意味と考えられる。
□『筑後国神名帳』…筑後国内の正六位以上の位階を持つ神々を郡毎に書き上げた、神々の名簿。天慶７年（944）、筑後国守が大宰府に提出したものの控えとされる文書。高良大社蔵、県指定文化財。
■鞴（ふいご）…鍛冶精錬を行うときに、炉の火力を上げる為に風を送る送風機。

其の四　大きに地動る

1 筑紫大地震と水縄活断層

近年、筑後地方の諸遺跡から、地震活動の痕跡である断層・地割れ・地滑り・土石流・液状化と噴砂・倒木痕などが相次いで発見されている。活断層の活動は、地形・地質的に明らかに認められる場合、マグニチュード六・五以上となるといわれる。また、液状化現象についても、Ⅴ(強震)～Ⅵ(烈震)以上の強い揺れの場合に発生するとされる。すなわち、これらは、極めて大規模な地震活動に伴うものと考えられるのである。

前出の上津土塁跡では、七世紀前半～八世紀後半の間に土塁本体が地盤の液状化によって崩壊し、修復されていた。また、筑後国府跡第九七次調査でも、前身官衙(先行官衙)の東限大溝底部から、液状化に伴う噴砂が発見された。発生時期は、出土土器から七世紀後半～八世紀半ばに絞られる。さらに、平成四年の山川前田遺跡の調査では、水縄断層本体の調査が行われた。ここでは四回の活動痕跡が確認され、最新の活動は六世紀～十二世紀の間であることが推定された。筑後国内で検出される地震痕跡は、その位置や年代、規模などから、水縄断層の活動によるものと考えてよい。

これらの遺跡調査を担当した松村一良は、『日本書紀』天武七年十二月条のある記事に注目した。

「是の月に、筑紫国、大きに地動る。地裂くること広さ二丈、長さ三千余丈。（後略）」

日本最古の地震に関する記録である。すなわち、天武七年（六七八）、筑紫国（七世紀末に筑前・筑後国に分割）で発生した地震は、幅六m、長さ約一〇kmに及ぶ凄まじい地割れを引き起こしたというのだ。しかも描写された被害状況や規模、地震の発生年代は、水縄断層とその周囲で検出される地震痕跡とも矛盾しない。

さて、平成十六年に実施された神道遺跡第二二次調査では、断層本体とともに、幅約七mの大規模な地割れが発見された。この数値は『日本書紀』の記述とも近い。記事の信憑性を裏付ける結果となったのである。

以上からわかるように、遺跡から発見される地震痕跡に具体的な年代が与えられた意義は大きい。筑紫大地震が七世紀における筑紫研究の重要な鍵を握っているといっても過言ではない。

44 筑後国府跡東限大溝の噴砂。すり鉢状の窪みの底から噴き上がり、大溝下層の黒色粘土層を貫く。まるで、天に立ち昇る龍のよう。

51 試掘坑の断面に見える神道遺跡の大規模な地割れ跡。幅は７ｍも近くある。背後は高良山。

52 山川前田遺跡で発見された水縄活断層系追分断層。都合４回の活動痕跡が確認された。

■天武七年…一般に西暦678年であるが、地震が発生した12月は、12月1日がユリウス歴の679年1月17日にあたることから、ユリウス歴の679年と記載されることもある。水縄断層系が動いた最後の年ということになる。

□水縄断層系…耳納山地の北側斜面に位置し、13の断層から構成される。長さは約23km、活動周期は約3,600年と推定されているが、活動した場合の地震規模はM7.1、一回の地震による断層の変位は約1.8mと計算されている。

2 神籠石の崩壊と七世紀の久留米

高良山神籠石の北側列石線は未発見で、現状では城壁が全周していないことは先述した。北側は地形が急峻で、かつ、母岩が露頭した箇所も多いことから、当初より列石線を構築しなかったとも考えられる。

一方で、昭和初期に同神籠石を詳細に踏査した武藤直治らは、「巨石が墜落し民家を破壊した」「久留米城築城の際に搬出した」「列石を掘り当てたが埋め戻した」といういくつかの伝承を紹介している。これが事実であれば、列石線は存在し、現在も一部は埋もれたままということになる。

こうしたなか、近年注目されているのが、筑紫大地震により北側城壁が崩壊したのではないかとする松村一良の説である。現在、高良大社社務所北側一帯は急傾斜の崖となっているが、これが円弧摩擦滑りによる斜面崩壊の痕跡であると指摘する。高良山神籠石は、活断層の真上に位置する山川前田遺跡を眼下に見下ろしており、同遺跡ではこのことを裏付けるように土石流が堆積した跡も発見されている。すなわち、マグニチュード七・一の地震を発生させる水縄断層の激しい地震動で、列石線が崩壊したと想定するのである。

これが正しければ、高良山神籠石が天武七年にはすでに存在していたことになり、物証が乏しい神籠石の年代解釈に、ひとつの定点を与えるものとなろう。

54 急峻な北側斜面の地形を利用した吉見岳城。付近を列石推定線が通るが、それらしき石材は確認されていない。あるいは同城築造の際に、破壊された可能性もあるのか。

52 山川前田遺跡上空（高良山北麓側）から見た高良山神籠石

55 上津土塁跡で見られる土塁版築土のズレ。

53 高良大社社務所北側に残る円弧摩擦滑りの跡

■**武藤直治**…1871－1960。旧久留米藩馬廻り役の家に生まれる。県立久留米高等女学校校長などを歴任。郷土の教育に力を注ぐ一方、実地に調査した郷土の史跡や先人に関する研究を精力的に行った。石野儀助と実施した高良山神籠石に関する調査成果は、未だに同神籠石研究の基本文献として重要な位置を占める（巻末主要参考文献の項参照）。

ここで、あらためて筑紫大地震の被害を被ったとされる諸遺跡を挙げると次のようになる。

① 筑後国府跡前身官衙（かんが）（先行官衙）
② 高良山神籠石
③ 上津土塁跡

このことから、少なくとも三遺跡が七世紀後半の天武七年（六七八）の時点で同時併存していたことが考えられる。

まず①の前身官衙は、その遺構や遺物内容から、何らかの行政的・軍事的拠点であったことは疑いない。②はその背後に聳える山塊に築造された山城、③は「藤山道（ふじやまみち）」と仮称する古道を遮断する防御施設である。つまり、これらが一連の計画と目的の下に設置され、互いが有機的に連携していた施設であると考えることができる。

前身官衙は前代からの重要な水上交通路である筑後川に面している。この川は有明海へと抜け、半島・大陸との交渉の道でもあることは先述した。一方、上津土塁が塞ぐ「藤山道」についても、有明海方面から北上し、肥前へ抜け大宰府方面へ向かう古墳時代以来の重要な交通路であった。

このように見てくると、松村が指摘しているように、高良山神籠石を含めた三施設が、有明海方面からの、例えば軍事的な侵攻を想定して周到に設置されたものと考えてもよいだろう。

さて、これらの造営時期が一つの焦点となることは間違いない。前身官衙から出土する遺物をみると、北限大溝下層では七世紀中頃には、その掘削が開始されている可能性がある。東限大溝の下層からも、七世紀中頃～同末の官衙的な様相を示す遺物が大量に出土している。田代地区の四面庇建物は、七世紀初頭の竪穴住居を破壊して建築されており、北限大溝とそれほど変わらない時期を想定することもできよう。これらは、七世紀中頃には前身官衙の造営がすでに開始されていたことを示唆しているものと思われる。また、他の大形建物の柱穴からは、七世紀後半～同末にかけての遺物を出土することが多い。その後も施設の拡充が積極的に実施されたものと考えられる。

前身官衙が七世紀中頃に造営を開始したとすれば、高良山神籠石・上津土塁についてもほぼ同時期に着工したと見てよいだろう。この頃、東アジアでは唐の軍事介入によって百済が滅びた。我が国はその救援のために、唐・新羅両国と敵対することになったのである。白村江の敗戦後も、三遺跡は維持管理され、あるいは整備拡充されている。唐・新羅からの侵攻に備えたことが想像できる。

対外的な危機が去った七世紀末～八世紀初頭にかけて、大宰府管内では本格的な律令制に基づく中央集権化の波が押し寄せる。南九州への武力支配の拡大は、隼人の反乱を呼び起こすことになった。田中正日子が述べるように、前身官衙がその支配の拠点として、重要な位置づけがなされたと見てよいだろう。その後、六九〇年代には筑後国が成立する。前身官衙の跡地は国衙（こくが）となり、筑後国府として新たな出発を果たしたのである。

56 北限大溝下層出土の須恵器。溝底から発見されたが、下層には遺物がほとんど含まれない。

57 前身官衙の正殿と考えられる建物が発見された筑後国府跡第210次調査地。現在は埋め戻され保存されている。

■**隼人**…古代日本において、九州南部と種子島・屋久島一帯に住んでいた人々。中央集権化に抵抗し、702年に薩摩国が設置された後も、しばしば反乱を起こした。720年には大隅国守を殺害し大規模な反乱となったが、大伴旅人によって征討され、翌年鎮圧された。この後、完全に服従することとなったが、これらの地域で班田収受が行われたのは800年になってからのことである。

関連年表

西暦	天皇・年号		記事（古代山城関連記事）	久留米の遺跡と主なできごと
478			倭王武（ワカタケル大王）、宋に使いを送る	・このころ御塚・権現塚古墳(大善寺町)が相次いで築造される
527			磐井の乱。翌年、磐井の子筑紫君葛子、糟屋屯倉を献上する	
536			那津宮家を修造し、筑紫・肥・豊の屯倉の穀を運ばせる	
537			大伴狭手彦・磐兄弟を朝鮮出兵させる。磐は筑紫にとどまり政をとる	
538			百済聖明王により仏教公伝（一説552年）	
554			百済使、筑紫に来たり助軍を乞う。聖明王、新羅の地で戦死	
562			新羅、半島南部の任那(伽?諸国)を滅ぼす。派兵するも敗退	・6世紀後半ころの筑後川流域では、下馬場古墳(草野町)など装飾古墳が多数築造される／古賀ノ上・吉積遺跡などの継続集落が出現する
587			蘇我氏、物部氏を滅ぼす。物部氏、稲城を築きて戦う	
593	推古	1	聖徳太子、摂政となる	
600		8	任那(伽?諸国)回復のため新羅に派兵	
602		10	来目皇子、新羅出兵のため志摩郡に駐屯する	
603		11	冠位十二階の制定。翌年、十七条憲法を制定	
607		15	小野妹子らを隋に派遣（遣隋使）、翌年隋使裴世清を伴い帰国	
609		17	筑紫大宰、百済僧の肥後葦北津への来泊を報告する	
630	舒明	2	犬上御田鍬らを唐に派遣（第1回遣唐使）	
644	皇極	3	蘇我蝦夷・入鹿、甘橿丘の家の外に城柵を作り、門の傍らに兵庫をつくる	
645		4	中大兄皇子ら入鹿を暗殺。譲位された孝徳天皇が即位、難波宮（前期難波宮）に遷都	
646	孝徳	2	「改新の詔」を公布、薄葬令がだされる	
647		3	淳足柵を造り柵戸を置く。翌年、磐舟柵を置く	
653		9	第2回遣唐使を派遣（～654）	
656	斉明	2	後飛鳥岡本宮へ遷る。多武峰に両槻宮を造り、「狂心渠」を掘って石を運び、宮の東の山に積む	
658		4	阿倍比羅夫、蝦夷・粛慎を征討(～660)／「或本云…繕修城柵断塞山川之兆也」（『日本書紀』）	
661		7	斉明天皇・中大兄皇子、新羅征討に向かう。那大津に上陸、朝倉宮へ入る。7月、斉明死去。	
663	天智	2	倭・百済軍、唐・新羅軍と白村江で交戦し大敗	
664		3	対馬嶋・壱岐嶋・筑紫国などに防人と烽を置き、筑紫に水城を築く	
665		4	長門国に築城、筑紫に大野城・基肄城を築く	
667		6	近江大津京へ遷都／倭国に高安城（669工事中止・修理）、讃岐国に屋嶋城、対馬国に金田城を築く	
668		7	天智即位／高句麗滅亡する	
670		9	庚午年籍をつくる／高安城を修理し、穀・塩を蓄え、長門に一城・筑紫に二城を築く	
672	天武	1	壬申の乱に際し、筑紫大宰栗隈王は出兵要請を拒否／筑紫国の城を高く掘りを深くして外敵に備える。三尾城を攻め落とす／7月、高安城の税倉が焼失する	・このころ御塚・権現塚古墳(大善寺町)が相次いで築造される
677		6	多禰嶋人を飛鳥寺の西の槻の下で饗す	
678		7	筑紫国大地震。日本最古の地震記録、筑後国府前身官衙(先行官衙)	・上津土塁跡・高良山神籠石等被害
682		11	大隅・阿多の隼人、方物を貢ぐ	
685		14	新羅使を筑紫に饗す（686・688にも）	
689	持統	3	浄御原令施行／筑紫大宰粟田真人、隼人を献ずる／筑紫に位記（辞令）を送り、新城を視察させる	
690		4	軍丁で筑紫国上陽咩郡の大伴部博麻、新羅の送使に従い帰国	・このころ南薫西遺跡に集落が出現
694		8	藤原京に遷都	・このころ筑後国が成立する(Ⅰ期国府)
698	文武	2	大宰府に大野・基肄・鞠智城の三城を修理させる／高安城を修理	
699		3	高安城を修理する／大宰府に三野・稲積の二城を修理させる	
701	大宝	1	大宝律令制定／栗田真人らを唐に派遣（遣唐使復活）／高安城を廃止	
702		2	薩摩多禰を征討し、戸を校し吏を置く／薩摩国が成立	
704	慶雲	1	大宰府に信濃の弓1400張を給付	
710	和銅	3	平城京へ遷都	・713年、遣新羅使従五位下道君首名、帰国16日後に筑後国守となる
713		6	大隅国が成立	
715	霊亀	1	郷里制施行／大宰府、新羅国使の帰国に際して綿と船を支給	
716		2	大宰府に弓5374張を支給	・718年、道君首名（兼肥後国守）、在任のまま病死
718	養老	2	養老律令制定	
719		3	備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城と停廃する	
720		4	阿倍比羅夫、筑紫大宰師に任命される／隼人、大隅国守を殺害、大伴旅人を征隼人持節将軍とし翌年鎮圧	
723		7	三世一身法制定	
735	天平	7	薩摩・大隅の隼人296人、入朝して調物を貢ず	・738年の筑後国正税帳断簡が残る
756	天平勝宝	8	怡土城の築城と水城の修理が行われる	・このころ筑後国府はⅡ期国府へと移転する
757	天平宝字	1	東国防人を廃し、西海道七国兵士を防人に充てる	
758		2	大宰府に唐の兵乱に備えるよう命ずる	
792	延暦	11	軍団兵士を廃止、健児を置く	
795		14	壱岐・対馬以外の防人と防人司が廃止される	

展示協力・資料提供

高良大社
清力美術館
朝倉市教育委員会
飯塚市教育委員会
うきは市教育委員会
大川市教育委員会
小郡市教育委員会
武雄市教育委員会
筑前町教育委員会
光市教育委員会
日田市教育委員会
前原市教育委員会
みやこ町教育委員会
みやま市教育委員会
行橋市教育委員会
田中正日子
佐田　茂
亀井輝一郎
吉村靖徳
松村一良
久留米市文化財サポーター
第四回神籠石サミット実行委員会
（順不同・敬称略）

主要参考文献（発表順）

□ **高良山神籠石に関するもの**

1 武藤直治・石野儀助「高良山神籠石」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第五輯、福岡県、一九三〇年。

2 樋口一成編『史跡高良山神籠石保存管理計画策定報告書』久留米市文化財調査報告書第十五集、一九七七年。

3 樋口一成「高良山神籠石」『久留米市史』第一巻、久留米市史編さん委員会、一九八一年。

4 松村一良「高良山神籠石」『久留米市史』第十二巻、資料編考古、久留米市史編さん委員会、一九九四年。

□ **前身官衙(先行官衙)・上津土塁・筑紫大地震・西海道に関するもの**

1 田中正日子「成立期の筑後国と大宰府」『筑後国府跡・国分寺跡』久留米市文化財調査報告書第八九集、一九八九年。

2 松村一良「『日本書紀』天武天皇七年条にみえる地震と上津土塁について」『九州史学』第九八号、一九九〇年。

3 松村一良「筑後国府跡」「古代官道跡」「上津土塁跡」「山川前田遺跡」『久留米市史』第十二巻、資料編考古、久留米市史編さん委員会、一九九四年。

4 尾崎源太郎・中村光雄・小澤太郎「第二編 原始・古代」『広川町史』上巻、広川町史編さん委員会、二〇〇五年。

5 神保公久「古代の防衛拠点」『図説・久留米・小郡・うきはの歴史』郷土出版社、二〇〇六年。

6 神保公久編『筑後国府跡-第二一〇次調査報告書』久留米市文化財調査報告書第二三五集、二〇〇六年。

7 松村一良編『筑後国府跡（一）』久留米市文化財調査報告書第二七一集、二〇〇八年。

8 松村一良編『筑後国府跡（二）』久留米市文化財調査報告書第二八四集、二〇〇九年。

※高良山神籠石は、昭和28年(1953)に国指定史跡となって以来、保存管理計画に基づいて山容の保全につとめています。
※表紙のコピー「城柵を繕い山川を断ち塞ぐ」は、『日本書紀』斉明四年是歳条或本の記事の一部ですが、緊迫する当時の東アジア情勢を端的に表現したものとして採用しました。

第34回　久留米の考古資料展・展示解説図録

高良山神籠石と七世紀のくるめ

平成21年10月17日　発行

編集・発行　久留米市文化観光部 文化財保護課
〒830-8520 久留米市城南町15－3
☎0942-30-9225 FAX 0942-30-9718
久留米市埋蔵文化財センター(え～るピア内)
〒830-0037 久留米市諏訪野町1830-6
☎0942-34-4995 FAX 0942-34-5045
印　　刷　谷印刷有限会社

筑後川上空から見た前身官衙（先行官衙）と高良山神籠石の想像図